

いま、コロナから考える

先日、学会で京都・奈良へ足を運んだが、大変なにぎわいであった。これで大阪・関西万博が開催されたらどうなるのだろうか。一方で七月初旬、コロナが第九波に入ったか否かを巡り、日本医師会と政府の見解に相違が生じていた。コロナウイルスが消失したわけではない。だが人々の行動や意識は、大きく変化しているようだ。

ちなみに「コロナ」をキーワードに、中日新聞の記事データベースを検索してみた。先月は千二百八十六件のヒット。二〇二〇年六月は六千九百三十八件、今年一月は二千二百件。目安ではないが、コロナ関連の記事数は明らかに減少傾向にある。

さらに、関心が薄れるだけではない。学生にコロナ禍の最中と、今何が違つかと尋ねてみた。皆が顔を見合わせ、「コロナ禍の頃ってどんな感じでしたっけ」と。三年間にわたるコロナ禍の記憶も、あっという間に薄らいでいるのか。

ある一冊の本がある。速水融著「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」（藤原書店・二〇〇六年）。書名の通り、一九一八年から二〇年にかけて日本でも猛威を振るったスペインかぜ（本来はインフルエンザだが通称で表記する）の状況を、全国の地方紙を含めた新聞記事から探った労作だ。著者によれば、統計資料は残っているのに、スペインかぜに関する既存文献はほとんどなかったという。つまりスペインかぜは、日本で完全に「忘れられて」しまっていたのである。理由の一つとして、大正中期の日本社会の大きな変動（大陸進出の本格化など）が、スペインかぜを「軽い病気」とみなしたのではないかと推察する。

このスペインかぜの先例からすれば、社会の動きによってコロナ禍の記憶は上書きされ、忘却が進んでしまうだろう。だが私たちがコロナ禍の記憶を留めていこうとすれば、忘却を押し進めようとする社会の動きにも敏感になるのではないか。どういふことか。それはコロナ禍の中で「オリンピックとは何なのか」と人々が問った、あの日々を忘れないでいることである。

（静岡文化芸術大教授）

2023年7月16日

中日新聞（朝刊）p.5